奉教人の死

芥川龍之介

たとひ三百歳の齢（よはひ）を保ち、楽しみ身に余ると云ふとも、未来永々の果しなき楽しみに比ぶれば、夢幻（ゆめまぼろし）の如し。

—慶長訳 Guia do Pecador —

善の道に立ち入りたらん人は、御教（みをしへ）にこもる不可思議の甘味を覚ゆべし。

—慶長訳 Imitatione Christi —

去（さ）んぬる頃、日本長崎の「さんた・るちや」と申す「えけれしや」（寺院）に、「ろおれんぞ」と申すこの国の少年がござつた。これは或年御降誕の祭の夜、その「えけれしや」の戸口に、餓ゑ疲れてうち伏して居つたを、参詣の奉教人衆（ほうけうにんしゆう）が介抱し、それより伴天連（ばてれん）の憐みにて、寺中に養はれる事となつたげでござるが、何故かその身の素性（すじやう）を問へば、故郷（ふるさと）は「はらいそ」（天国）父の名は「でうす」（天主）などと、何時も事もなげな笑に紛らいて、とんとまことは明した事もござない。

なれど親の代から「ぜんちよ」（異教徒）の輩（ともがら）であらなんだ事だけは、手くびにかけた青玉（あをだま）の「こんたつ」（念珠）を見ても、知れたと申す。されば伴天連はじめ、多くの「いるまん」衆（法兄弟）も、よも怪しいものではござるまいとおぼされて、ねんごろに扶持して置かれたが、その信心の堅固なは、幼いにも似ず「すぺりおれす」（長老衆）が舌を捲くばかりであつたれば、一同も「ろおれんぞ」は天童の生れがはりであらうずなど申し、いづくの生れ、たれの子とも知れぬものを、無下（むげ）にめでいつくしんで居つたげでござる。

　して又この「ろおれんぞ」は、顔かたちが玉のやう

に清らかであつたに、声ざまも女のやうに優しかつたれば、一しほ人々のあはれみを惹いたのでござらう。中でもこの国の「いるまん」に「しめおん」と申したは、「ろおれんぞ」を弟のやうにもてなし、「えけれしや」の出入りにも、必仲よう手を組み合せて居つた。この「しめおん」は、元さる大名に仕へた、槍一すぢの家がらなものぢや。されば身のたけも抜群なに、性得の剛力であつたに由つて、伴天連が「ぜんちよ」ばらの石瓦にうたるるを、防いで進ぜた事も、一度二度の沙汰ではごさない。それが「ろおれんぞ」と睦じうするさまは、とんと鳩になづむ荒鷲のやうであつた

とも申さうか。或は「ればのん」山の檜(ひのき)に、葡萄(えび)かづらが纏(まと)ひついて、花咲いたやうであつたとも申さうず。

さる程に三年あまりの年月は、流るるやうにすぎたに由つて、「ろおれんぞ」はやがて元服もすべき時節となつた。したがその頃怪しげな噂が伝はつたと申すは、「さんた・るちや」から遠からぬ町方の傘張の娘が、「ろおれんぞ」と親しうすると云ふ事ぢや。この傘張の翁(おきな)も天主の御教を奉ずる人故、娘ともども「えけれしや」へは参る慣(ならはし)であつたに、御祈の暇にも、娘は香炉をさげた「ろおれんぞ」の姿から、眼を離したと申す事がござない。まして「えけれしや」への出入りに

は、必(かならず)髪かたちを美しうして、「ろおれんぞ」のゐる方へ眼づかひをするが定(ぢやう)であつた。さればおのづと奉教人衆の人目にも止り、娘が行きずりに「ろおれんぞ」の足を踏んだと云ひ出すものもあれば、二人が艶書をとりかはすをしかと見とどけたと申すものも、出て来たげでござる。

　由つて伴天連にも、すて置かれず思(おぼ)されたのでござらう。或日「ろおれんぞ」を召されて、白ひげを噛みながら、「その方、傘張の娘と兎角の噂ある由を聞いたが、よもやまことではあるまい。どうぢや」ともの優しう尋ねられた。したが「ろおれんぞ」は、唯(ただ)憂はし

げに頭を振つて、「そのやうな事は一向に存じよう筈もござらぬ」と、涙声に繰返すばかり故、伴天達もさすがに我(が)を折られて、年配と云ひ、日頃の信心と云ひ、かうまで申すものに偽はあるまいと思されたげでござる。

さて一応伴天連の疑(うたがひ)は晴れてぢやが、「さんた・るちや」へ参る人々の間では、容易にとかうの沙汰が絶えさうもござない。されば兄弟同様にして居つた「しめおん」の気がかりは、又人一倍ぢや。始はかやうな淫(みだら)な事を、ものものしう詮議立てするが、おのれにも恥しうて、うちつけに尋ねようは元より、「ろおれんぞ」

の顔さへまさかとは見られぬ程であつたが、或時「さんた・るちや」の後の庭で、「ろおれんぞ」へ宛てた娘の艶書を拾うたに由つて、人気ない部屋にゐたを幸、「ろおれんぞ」の前にその文をつきつけて、嚇しつ賺しつ、さまざまに問ひただいた。なれど「ろおれんぞ」は唯、美しい顔を赤らめて、「娘は私に心を寄せましたげでござれど、私は文を貰うたばかり、とんと口を利いた事もござらぬ」と申す。なれど世間のそしりもある事でござれば、「しめおん」は猶も押して問ひ詰つたに、「ろおれんぞ」はわびしげな眼で、ぢつと相手を見つめたと思へば、「私はお主にさへ、嘘をつきさうな人

間に見えるさうな」と、咎（とが）めるやうに云ひ放つて、とんと燕（つばくろ）か何ぞのやうに、その儘つと部屋を立つて行つてしまうた。かう云はれて見れば、「しめおん」も己の疑深かつたのが恥しうもなつたに由つて、悄々（すごすご）その場を去らうとしたに、いきなり駈けこんで来たは、少年の「ろおれんぞ」ぢや。それが飛びつくやうに「しめおん」の頸（うなじ）を抱くと、喘（あへ）ぐやうに「私が悪かつた。許して下されい」と囁（ささや）いて、こなたが一言（ひとこと）も答へぬ間に、涙に濡れた顔を隠さう為か、相手をつきのけるやうに身を開いて、一散に又元来た方へ、走つて往（い）んでしまうたと申す。さればその「私が悪かつた」と囁い

たのも、娘と密通したのが悪かつたと云ふのやら、或は「しめおん」につれなうしたのが悪かつたと云ふのやら、一円合点（いちゑんがてん）の致さうやうがなかつたとの事でござる。

　するとその後間もなう起つたのは、その傘張の娘が孕（みごも）つたと云ふ騒ぎぢや。しかも腹の子の父親は、「さんた・るちや」の「ろおれんぞ」ぢやと、正（まさ）しう父の前で申したげでござる。されば傘張の翁は火のやうに憤（いきどほ）つて、即刻伴天連のもとへ委細を訴へに参つた。かうなる上は「ろおれんぞ」も、かつふつ云ひ訳の致しやうがござない。その日の中に伴天連を始め、「い

るまん」衆一同の談合に由つて、破門を申し渡される事になつた。元より破門の沙汰がある上は、伴天連の手もとをも追ひ払はれる事でござれば、糊口のよすがに困るのも目前ぢや。したがかやうな罪人を、この儘「さんた・るちや」に止めて置いては、御主（おんあるじ）の「ぐろおりや」（栄光）にも関（かかは）る事ゆゑ、日頃親しう致いた人々も、涙をのんで「ろおれんぞ」を追ひ払つたと申す事でござる。

その中でも哀れをとどめたは、兄弟のやうにして居つた「しめおん」の身の上ぢや。これは「ろおれんぞ」が追ひ出されると云ふ悲しさよりも、「ろおれんぞ」に

欺かれたと云ふ腹立たしさが一倍故、あのいたいけな少年が、折からの凩（こがらし）が吹く中へ、しをしをと戸口を出かかつたに、傍から拳（こぶし）をふるうて、したたかその美しい顔を打つた。「ろおれんぞ」は剛力に打たれたに由つて、思はずそこへ倒れたが、やがて起きあがると、涙ぐんだ眼で、空を仰ぎながら、「御主も許させ給へ。『しめおん』は、己（おの）が仕業もわきまへぬものでござる」と、わななく声で祈つたと申す事ぢや。「しめおん」もこれには気が挫けたのでござらう。暫くは唯戸口に立つて、拳を空（くう）にふるうて居つたが、その外の「いるまん」衆も、いろいろととりないたれば、それを機会（しほ）に

手を束(つか)ねて、嵐も吹き出でようず空の如く、凄(すさま)じく顔を曇らせながら、悄々(すごすご)「さんた・るちや」の門を出る「ろおれんぞ」の後姿を、貪るやうにきつと見送つて居つた。その時居合はせた奉教人衆の話を伝へ聞けば、時しも凩にゆらぐ日輪が、うなだれて歩む「ろおれんぞ」の頭のかなた、長崎の西の空に沈まうず景色であつたに由つて、あの少年のやさしい姿は、とんと一天の火焰の中に、立ちきはまつたやうに見えたと申す。

その後の「ろおれんぞ」は、「さんた・るちや」の内陣に香炉をかざした昔とは打つて変つて、町はづれの非人小屋に起き伏しする、世にも哀れな乞食(こつじき)であつた。

ましてその前身は、「ぜんちよ」の輩（ともがら）にはゑとりのやうにさげしまるる、天主の御教を奉ずるものぢや。されば町を行けば、心ない童部（わらべ）に嘲（あざけ）らるるは元より、刀杖瓦石（たうぢやうぐわせき）の難に遭（あ）うた事も、度々ござるげに聞き及んだ。いや、嘗（か）つては、長崎の町にはびこつた、恐しい熱病にとりつかれて、七日七夜の間、道ばたに伏しまろんでは、苦み悶（もだ）えたとも申す事でござる。したが、「でうす」無量無辺の御愛憐は、その都度「ろおれんぞ」が一命を救はせ給うたのみか、施物の米銭のない折々には、山の木の実、海の魚介など、その日の糧（かて）を恵ませ給ふのが常であつた。由つて「ろおれんぞ」も、朝

夕の祈は「さんた・るちや」に在つた昔を忘れず、手くびにかけた「こんたつ」も、青玉の色を変へなかつたと申す事ぢや。なんの、それのみか、夜毎に更闌(かうた)けて人音も静まる頃となれば、この少年はひそかに町はづれの非人小屋を脱け出(いだ)いて、月を踏んでは住み馴れた「さんた・るちや」へ、御主「ぜす・きりしと」の御加護を祈りまゐらせに詣でて居つた。

なれど同じ「えけれしや」に詣づる奉教人衆も、その頃はとんと「ろおれんぞ」を疎(うと)んじはてて、伴天連はじめ、誰一人憐みをかくるものもござらなんだ。ことわりかな、破門の折から所行無慚(しよぎやうむざん)の少年と思ひこん

で居つたに由つて、何として夜毎に、独り「えけれしや」へ参る程の、信心ものぢやとは知られうぞ。これも「でうす」千万無量の御計らひの一つ故、よしない儀とは申しながら、「ろおれんぞ」が身にとつては、いみじくも亦哀れな事でござつた。

さる程に、こなたはあの傘張の娘ぢや。「ろおれんぞ」が破門されると間もなく、月も満たず女の子を産み落いたが、さすがにかたくなしい父の翁も、初孫の顔は憎からず思うたのでござらう、娘ともども大切に介抱して、自ら抱きもしかかへもし、時にはもてあそびの人形などもとらせたと申す事でござる。翁は元よ

りさもあらうずなれど、ここに稀有（けう）なは「いるまん」の「しめおん」ぢや。あの「ぢやぼ」（悪魔）をも挫（ひし）がうず大男が、娘に子が産まれるや否や、暇ある毎に傘張の翁を訪れて、無骨な腕に幼子を抱き上げては、にがにがしげな顔に涙を浮べて、弟と愛（いつく）しんだ、あえかな「ろおれんぞ」の優姿を、思ひ慕つて居つたと申す。唯、娘のみは、「さんた・るちや」を出でてこの方、絶えて「ろおれんぞ」が姿を見せぬのを、怨めしう歎きわびた気色（けしき）であつたれば、「しめおん」の訪れるのさへ、何かと快からず思ふげに見えた。

この国の諺（ことわざ）にも、光陰に関守（せきもり）なしと申す通り、と

かうする程に、一年（ひととせ）あまりの年月は、瞬（また）くひまに過ぎたと思召（おぼしめ）されい。ここに思ひもよらぬ大変が起つたと申すは、一夜の中に長崎の町の半ばを焼き払つた、あの大火事のあつた事ぢや。まことにその折の景色の凄じさは、末期（まつご）の御裁判（おんさばき）の喇叭（らつぱ）の音が、一天の火の光をつんざいて、鳴り渡つたかと思はれるばかり、世にも身の毛のよだつものでござつた。その時、あの傘張の翁の家は、運悪う風下にあつたに由つて、見る見る焔に包れたが、さて親子眷族（けんぞく）、慌てふためいて、逃げ出（いだ）いて見れば、娘が産んだ女の子の姿が見えぬと云ふ始末ぢや。一定（いちぢやう）、一間（ひとま）どころに寝かいて置いたを、忘れ

てここまで逃げのびたのであらうず。されば翁は足ずりをして罵りわめく。娘も亦、人に遮（さへぎ）られずば、火の中へも馳（は）せ入つて、助け出さう気色（けしき）に見えた。なれど風は益（ますます）加はつて、焔の舌は天上の星をも焦さうず吼（たけ）りやうぢや。それ故火を救ひに集つた町方の人々も、唯、あれよあれよと立ち騒いで、狂気のやうな娘をとり鎮めるより外に、せん方も亦あるまじい。所へひとり、多くの人を押しわけて、馳（か）けつけて参つたは、あの「いるまん」の「しめおん」でござる。これは矢玉の下もくぐつたげな、逞しい大丈夫でござれば、ありやうを見るより早く、勇んで焔の中へ向うたが、あま

りの火勢に辟易（へきえき）致いたのでござらう。二三度煙をくぐつたと見る間に、背（そびら）をめぐらして、一散に逃げ出いた。して翁と娘とが佇（たたず）んだ前へ来て、「これも『でうす』万事にかなはせたまふ御計らひの一つぢや。詮ない事とあきらめられい」と申す。その時翁の傍から、誰とも知らず、高らかに「御主（おんあるじ）、助け給へ」と叫ぶものがござつた。声ざまに聞き覚えもござれば、「しめおん」が頭（かうべ）をめぐらして、その声の主をきつと見れば、いかな事、これは紛（まが）ひもない「ろおれんぞ」ぢや。清らかに痩せ細つた顔は、火の光に赤うかがやいて、風に乱れる黒髪も、肩に余るげに思はれたが、哀れにも美し

い眉目（みめ）のかたちは、一目見てそれと知られた。その「ろおれんぞ」が、乞食の姿のまま、群（むらが）る人々の前に立つて、目もはなたず燃えさかる家を眺めて居る。と思うたのは、まことに瞬（またた）く間もない程ぢや。一しきり焔を煽（あふ）つて、恐しい風が吹き渡つたと見れば、「ろおれんぞ」の姿はまつしぐらに、早くも火の柱、火の壁、火の梁（うつばり）の中にはいつて居つた。「しめおん」は思はず遍身に汗を流いて、空高く「くるす」（十字）を描きながら、己も「御主、助け給へ」と叫んだが、何故かその時心の眼には、凩（こがらし）に揺るる日輪の光を浴びて、「さんた・るちや」の門に立ちきはまつた、美しく悲しげ

な、「ろおれんぞ」の姿が浮んだと申す。

　なれどあたりに居つた奉教人衆は、「ろおれんぞ」が健気(けなげ)な振舞に驚きながらも、破戒の昔を忘れかねたのでもござらう。忽(たちまち)兎角の批判は風に乗つて、人どよめきの上を渡つて参つた。と申すは、「さすが親子の情あひは争はれぬものと見えた。己が身の罪を恥ぢて、このあたりへは影も見せなんだ『ろおれんぞ』が、今こそ一人子の命を救はうとて、火の中へはいつたぞよ」と、誰ともなく罵りかはしたのでござる。これには翁(おきな)さへ同心と覚えて、「ろおれんぞ」の姿を眺めてからは、怪しい心の騒ぎを隠さうず為か、立ちつ居つ身

を悶えて、何やら愚（おろか）しい事のみを、声高（こわだか）わめいて［#「わめいて」は底本では「わめいって」］居つた。なれど当の娘ばかりは、狂ほしく大地に跪（ひざまづ）いて、両の手で顔をうづめながら、一心不乱に祈誓を凝（こ）らいて、身動きをする気色さへもござない。その空には火の粉が雨のやうに降りかかる。煙も地を掃（はら）つて、面（おもて）を打つた。したが娘は黙然と頭を垂れて、身も世も忘れた祈り三昧（ざんまい）でござる。

　とかうする程に、再（ふたたび）火の前に群つた人々が、一度にどつとどよめくかと見れば、髪をふり乱いた「ろおれんぞ」が、もろ手に幼子をかい抱いて、乱れとぶ焔

の中から、天(あま)くだるやうに姿を現(あらは)いた。なれどその時、燃え尽きた梁(うつばり)の一つが、俄(にはか)に半ばから折れたのでござらう。凄じい音と共に、一なだれの煙焔(えんえん)が半空(なかぞら)に迸(ほとばし)つたと思ふ間もなく、「ろおれんぞ」の姿ははたと見えずなつて、跡には唯火の柱が、珊瑚の如くそば立つたばかりでござる。

　あまりの凶事に心も消えて、「しめおん」をはじめ翁まで、居あはせた程の奉教人衆は、皆目の眩(くら)む思ひがござつた。中にも娘はけたたましう泣き叫んで、一度は脛(はぎ)もあらはに躍り立つたが、やがて雷(いかづち)に打たれた人のやうに、そのまま大地にひれふしたと申す。さも

あらばあれ、ひれふした娘の手には、何時かあの幼い女の子が、生死不定（しやうじふぢやう）の姿ながら、ひしと抱かれて居つたをいかにしようぞ。ああ、広大無辺なる「でうす」の御知慧（おんちゑ）、御力は、何とたたへ奉る詞（ことば）だにござない。燃え崩れる梁に打たれながら、「ろおれんぞ」が必死の力をしぼつて、こなたへ投げた幼子は、折よく娘の足もとへ、怪我もなくまろび落ちたのでござる。

　されば娘が大地にひれ伏して、嬉し涙に咽（むせ）んだ声と共に、もろ手をさしあげて立つた翁の口からは、「でうす」の御慈悲をほめ奉る声が、自らおごそかに溢れて参つた。いや、まさに溢れようずけはひであつたとも

申さうか。それより先に「しめおん」は、さかまく火の嵐の中へ、「ろおれんぞ」を救はうず一念から、真一文字に躍りこんだに由つて、翁の声は再（ふたたび）気づかはしげな、いたましい祈りの言（ことば）となつて、夜空に高くあがつたのでござる。これは元より翁のみではござない。親子を囲んだ奉教人衆は、皆一同に声を揃へて、「御主、助け給へ」と、泣く泣く祈りを捧げたのぢや。して「びるぜん・まりや」の御子（みこ）、なべての人の苦しみと悲しみを己（おの）がものの如くに見そなはす、われらが御主「ぜす・きりしと」は、遂にこの祈りを聞き入れ給うた。見られい。むごたらしう焼けただれた「ろおれんぞ」

は、「しめおん」が腕に抱かれて、早くも火と煙とのただ中から、救ひ出されて参つたではないか。

なれどその夜の大変は、これのみではござなんだ。息も絶え絶えな「ろおれんぞ」が、とりあへず奉教人衆の手に舁(か)かれて、風上にあつたあの「えけれしや」の門へ横へられた時の事ぢや。それまで幼子を胸に抱きしめて、涙にくれてゐた傘張の娘は、折から門へ出でられた伴天連の足もとに跪(ひざまづ)くと、並み居る人々の目前で、「この女子(をなご)は『ろおれんぞ』様の種ではおぢやらぬ。まことは妾が家隣の『ぜんちよ』の子と密通して、まうけた娘でおぢやるわいの」と思ひもよらぬ「こ

ひさん」（懺悔）を仕（つかま）つた。その思ひつめた声ざまの震へと申し、その泣きぬれた双の眼のかがやきと申し、この「こひさん」には、露ばかりの偽さへ、あらうとは思はれ申さぬ。道理（ことわり）かな、肩を並べた奉教人衆は、天を焦がす猛火も忘れて、息さへつかぬやうに声を呑んだ。

　娘が涙ををさめて、申し次いだは、「妾は日頃『ろおれんぞ』様を恋ひ慕うて居つたなれど、御信心の堅固さからあまりにつれなくもてなされる故、つい怨む心も出て、腹の子を『ろおれんぞ』様の種と申し偽り、妾につらかつた口惜しさを思ひ知らさうと致いたので

おぢやる。なれど『ろおれんぞ』様のお心の気高さは、妾が大罪をも憎ませ給はいで、今宵は御身の危さをもうち忘れ、『いんへるの』（地獄）にもまがふ火焔の中から、妾娘の一命を辱《かたじけな》くも救はせ給うた。その御憐み、御計らひ、まことに御主『ぜす・きりしと』の再来かともをがまれ申す。さるにても妾が重々の極悪を思へば、この五体は忽《たちまち》『ぢやぼ』の爪にかかつて、寸々に裂かれようとも、中々怨む所はおぢやるまい。」娘は「こひさん」を致いも果てず、大地に身を投げて泣き伏した。

二重三重《ふたへみへ》に群つた奉教人衆の間から、「まるちり」（殉

教）ぢや、「まるちり」ぢやと云ふ声が、波のやうに起つたのは、丁度この時の事でござる。殊勝にも「ろおれんぞ」は、罪人を憐む心から、御主「ぜす・きりしと」の御行跡を踏んで、乞食にまで身を落いた。して父と仰ぐ伴天連も、兄とたのむ「しめおん」も、皆その心を知らなんだ。これが「まるちり」でなうて、何でござらう。

したが、当の「ろおれんぞ」は、娘の「こひさん」を聞きながらも、僅に二三度頷（うなづ）いて見せたばかり、髪は焼け肌は焦げて、手も足も動かぬ上に、口をきかう気色（けしき）さへも今は全く尽きたげでござる。娘の「こひさ

ん」に胸を破つた翁と「しめおん」とは、その枕がみに蹲（うづくま）つて、何かと介抱を致いて居つたが、「ろおれんぞ」の息は、刻々に短うなつて、最期（さいご）ももはや遠くはあるまじい。唯、日頃と変らぬのは、遙に天上を仰いで居る、星のやうな瞳の色ばかりぢや。

やがて娘の「こひさん」に耳をすまされた伴天連は、吹き荒（すさ）ぶ夜風に白ひげをなびかせながら、「さんた・るちや」の門を後にして、おごそかに申されたは、「悔い改むるものは、幸（さいはひ）ぢや。何しにその幸なものを、人間の手に罰しようぞ。これより益（ますます）、『でうす』の御戒（おんいましめ）を身にしめて、心静に末期（まつご）の御裁判（おんさばき）の日を待つ

たがよい。又『ろおれんぞ』がわが身の行儀を、御主『ぜす・きりしと』とひとしく奉らうず志は、この国の奉教人衆の中にあつても、類稀（たぐひまれ）なる徳行でござる。別して少年の身とは云ひ――」ああ、これは又何とした事でござらうぞ。ここまで申された伴天連は、俄（にはか）にはたと口を噤（つぐ）んで、あたかも「はらいそ」の光を望んだやうに、ぢつと足もとの「ろおれんぞ」の姿を見守られた。その恭（うやうや）しげな容子（ようす）はどうぢや。その両の手のふるへざまも、尋常（よのつね）の事ではござるまい。おう、伴天連のからびた頰の上には、とめどなく涙が溢れ流れるぞよ。

見られい。「しめおん」。見られい。傘張の翁。御主「ぜす・きりしと」の御血潮よりも赤い、火の光を一身に浴びて、声もなく「さんた・るちや」の門に横はつた、いみじくも美しい少年の胸には、焦げ破れた衣（ころも）のひまから、清らかな二つの乳房が、玉のやうに露（あらは）れて居るではないか。今は焼けただれた面輪（おもわ）にも、自（おのづか）らなやさしさは、隠れようすべもあるまじい。おう、「ろおれんぞ」は女ぢや。「ろおれんぞ」は女ぢや。見られい。猛火を後にして、垣のやうに佇んでゐる奉教人衆、邪淫の戒を破つたに由つて「さんた・るちや」を逐（お）はれた「ろおれんぞ」は、傘張の娘と同じ、眼（ま）なざしの

あでやかなこの国の女ぢや。

まことにその刹那（せつな）の尊い恐しさは、あたかも「でうす」の御声が、星の光も見えぬ遠い空から、伝はつて来るやうであつたと申す。されば「さんた・るちや」の前に居並んだ奉教人衆は、風に吹かれる穂麦のやうに、誰からともなく頭を垂れて、悉（ことごと）く「ろおれんぞ」のまはりに跪（ひざまづ）いた。その中で聞えるものは、唯、空をどよもして燃えしきる、万丈の焔の響ばかりでござる。いや、誰やらの啜（すす）り泣く声も聞えたが、それは傘張の娘でござらうか。或は又自ら兄とも思うた、あの「いるまん」の「しめおん」でござらうか。やがてその

寂寞（じゃくまく）たるあたりをふるはせて、「ろおれんぞ」の上に高く手をかざしながら、伴天連の御経を誦（ず）せられる声が、おごそかに悲しく耳にはいつた。して御経の声がやんだ時、「ろおれんぞ」と呼ばれた、この国のうら若い女は、まだ暗い夜のあなたに、「はらいそ」の「ぐろおりや」を仰ぎ見て、安らかなほほ笑みを唇に止めたまま、静に息が絶えたのでござる。……

その女の一生は、この外に何一つ、知られなんだげに聞き及んだ。なれどそれが、何事でござらうぞ。なべて人の世の尊さは、何ものにも換へ難い、刹那の感動に極るものぢや。暗夜の海にも譬（たと）へようず煩悩心（ぼんなうしん）の

空に一波をあげて、未(いまだ)出ぬ月の光を、水沫(みなわ)の中に捕へてこそ、生きて甲斐ある命とも申さうず。されば「ろおれんぞ」が最期を知るものは、「ろおれんぞ」の一生を知るものではござるまいか。

二

予が所蔵に関る、長崎耶蘇会出版の一書、題して「れげんだ・おうれあ」と云ふ。蓋(けだ)し、LEGENDA

AUREA の意なり。されど内容は必しも、西欧の所謂(いはゆる)「黄金伝説」ならず。彼土(かのど)の使徒聖人が言行を録すると共に、併(あは)せて本邦西教徒が勇猛精進の事蹟をも採録し、以て福音伝道の一助たらしめんとせしものの如し。

体裁は上下二巻、美濃紙(みのがみ)摺(ずり)草体交(さうたいまじ)り平仮名文にして、印刷甚しく鮮明を欠き、活字なりや否やを明にせず。上巻の扉には、羅甸(ラテン)字にて書名を横書し、その下に漢字にて「御出世以来千五百九十六年、慶長二年三月上旬鏤刻(るこく)也」の二行を縦書す。年代の左右には喇叭(らつぱ)を吹ける天使の画像あり。技巧頗(すこぶる)幼稚なれども、亦掬(きく)す可き趣致なしとせず。下巻も扉に「五月中旬鏤刻也」

の句あるを除いては、全く上巻と異同なし。

両巻とも紙数は約六十頁にして、載（の）する所の黄金伝説は、上巻八章、下巻十章を数ふ。その他各巻の巻首に著者不明の序文及羅甸（ラテン）字を加へたる目次あり。序文は文章雅馴（がじゅん）ならずして、間々（まま）欧文を直訳せる如き語法を交へ、一見その伴天連たる西人の手になりしやを疑はしむ。

以上採録したる「奉教人の死」は、該（がい）「れげんだ・おうれあ」下巻第二章に依るものにして、恐らくは当時長崎の一西教寺院に起りし、事実の忠実なる記録ならんか。但、記事中の大火なるものは、「長崎港草」以

下諸書に徴するも、その有無をすら明にせざるを以て、事実の正確なる年代に至っては、全くこれを決定するを得ず。

予は「奉教人の死」に於て、発表の必要上、多少の文飾を敢（あへ）てしたり。もし原文の平易雅馴なる筆致にして、甚しく毀損（きそん）せらるる事なからんか、予の幸甚とする所なりと云爾（しかいふ）。

（大正七年八月）

底本：「現代日本文学大系　43　芥川龍之介集」筑摩書房
1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行
入力：j.utiyama
校正：八木正三
1998年6月14日公開
2010年11月4日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。